

# 筑後地域における写し霊場の開設背景 —三井四国八十八ヶ所を事例として—

川路 崇博

## Background to Establishment of the Utsushi-Reijyo in the Chikugo Region: A Case of the Mii-Shikoku Eighty-Eight Sacred Places

Takahiro KAWAJI

【要約】四国八十八ヶ所や西国三十三所など多くの巡礼地があるなか、日本各地にそれらを写した「写し霊場」がある。九州からの四国八十八ヶ所巡礼者は多いとは言えないが、九州各地に写し霊場が見られる。多くの写し霊場は、四国八十八ヶ所に倣って札所番号と札所名を設定している。しかしながら筑後地域にある三井四国八十八ヶ所には、札所番号がなく、さらに札所名が四国八十八ヶ所のそれと一致しない。また札所数も142確認できる。そこで三井四国八十八ヶ所の開設背景を、聞き取り調査と現地調査、資料から検討した。その結果、三井四国八十八ヶ所はもとより存在していた大師信仰に基づき既存の祠やお堂を四国八十八ヶ所の札所に見立てたものであり、新規に札所を開設したものではないことが示唆される。またのちに当初札所ではなかった祠やお堂と、新たに開設されたそれらを札所として追加したため、札所数が88を大きく越えることとなり札所番号がなくなったことが推測できる。

【キーワード】写し霊場、四国遍路、三井四国八十八ヶ所、大師信仰

### 1. はじめに

世界はもとより日本国内にも多くの巡礼地が存在している。中でも、四国八十八ヶ所（以下、「四国」とする）は、西国三十三所（以下、「西国」とする）と並びよく知られている。四国では、空海（弘法大師）とゆかりがある88の寺院を巡る。四国は、2014年に開創1200年を迎えたとされることを記念して様々な催しがあったように、現在でも多くの巡礼者を集めている<sup>1)</sup>。

一方、四国や西国などを「写し」た霊場も日本全国に数多く存在する<sup>2)</sup>。これを本稿では以下「写し霊場」とする。四国の写し霊場として良く知られたものとして、小豆島八十八ヶ所（香川県）、知多四国八十八ヶ所（愛知県）、篠栗四国八十八ヶ所（福岡県）などがある。さらに寺院内や地域内にミニ四国が設けられることも珍しくない。

聖地巡礼の中でも四国の学術的研究は大正期に入るまでまったくなされておらず、本格的に研究が始まったのは昭和三十年代後半<sup>3)</sup>であるとされている（頼富・白木、2001）。頼富・白木（2001）は、その後多くの分野（社会学や民俗学、建築学など）からの研究が始まったと

しているが、同時に研究はいまだ発展途上ともしている。

## 2. 先行研究

新規霊場の開設や霊場の再興の時期は、「江戸中期から後期」「明治20年代以降」「戦前」「昭和40年代から現在」の4期に分類される(柴谷, 2008)。柴谷(2008)は、特に近年の新規霊場の開設や霊場の再興には、〈仕掛け人〉が存在していることを指摘している。

山本(2003)は写し霊場を、開設主体と開設規模<sup>4)</sup>から「村写し型」「国写し型」「里山型」「集合型」の4つに類型した。そのうえで、徳島県の写し霊場は里山型が中心であり、国写し型はほとんど存在しないことを確かめた。ただしこの研究では、それぞれの写し霊場に関する開設経緯を明らかにしていない。また研究対象は比較的広域な地域(県単位)である。

良く知られている小豆島八十八ヶ所については、四国と同じく島を右回りに一周していることや、札所の選定方法と配置方法について明らかにされている(小田, 1984)。小田(1984)は、モデルとなる四国と西国の要素がどの程度残され、また変化したかを検討している。ただし小豆島八十八ヶ所も山本(2003)と同じく比較的広範囲の霊場である。小豆島の面積は153.26km<sup>2</sup>(国土地理院, 2017)であり、小豆島が属している香川県の面積の約10%弱を占めていることからその大きさは明らかである。

また近藤(1993)は、ミニチュア巡礼地を対象として四国遍路との比較し、空間演出のデザイン手法からの検討を試みた。結果、「写し」過程がモデル空間の聖地構造の写し、儀礼構造の写し、シンボル(砂)<sup>5)</sup>の移植から成立していることを確認している(近藤, 1993)。ただし、成立条件までにとどまり、成立背景の解明には至っていない。

## 3. 研究の目的

先行研究のとおり、写し霊場の開設背景並びに経緯の解明は、十分に進んでいるとは言えない。2005年から2006年にかけて第88番札所大窪寺とその近隣施設および第28番札所大日寺で実施された調査によると、九州からの四国遍路巡礼者は5.7%である(柴谷, 2007)。また2011年に第50番札所繁多寺で実施された調査によると8.3%<sup>6)</sup>である(山川, 2012)。地域ごとの人口比を考慮しても多いとは言えない九州からの四国遍路巡礼者である一方、四国の写し霊場は九州各地で見られる。

例えば、福岡県には前述の篠栗四国八十八ヶ所ほか、粕屋北部新四国八十八ヶ所などがある。また、長崎県には長崎市内を中心とした長崎四国八十八ヶ所や諫早市を中心とした諫江八十八ヶ所や五島八十八ヶ所、熊本県には託麻新四国八十八ヶ所などもある。これらの写し霊場は四国と同じく88の札所といくつかの番外札所で構成されている。

本稿では、よく知られている篠栗四国八十八ヶ所がある福岡県の中でも、筑後地域を中心とした「三井四国八十八ヶ所」を取り上げる。その理由は、三井四国八十八ヶ所(以下、三井四国)は88の札所にとどまらず、予備調査(後述)より142の札所で構成されているという他の写し霊場とは異なった特徴を持っているためである。

また、久留米市を中心とした筑後地域においては、筑後国一の宮高良大社や水天宮総本宮、久留米藩を治めていた有馬家の菩提寺である梅林寺、主に商売人の信仰を集めたとされる恵比須様(恵比須講)など、多くの信仰対象が存在している。三井四国が開設されたのは明治中頃と推測され、いわば後発とも言える。このようななか三井四国が成立した背景を明らかにする。

## 4. 研究の方法

### 4.1. 予備調査とその結果

筑後地域には、三井四国の札所（祠やお堂）が散見される。著者宅近辺にも4㎡ほどの大きさの札所がいくつか見られる。そこでまず、2016年3月に札所（札所名：鞍内西）が敷地内にあるA氏からその概要を聞き取った。これを予備調査とする。調査内容は以下の3つとした。

- (1) 行事の実施状況
- (2) 札所の数
- (3) その他の札所の場所

(1) について、4月と10月にすべての札所をめぐる「大参り」を実施しているという回答を得た。またこのとき2016年4月実施の春季大参りのスケジュールを示した印刷物を得た。この印刷物により、大参りは1回につき6日間実施されることが分かった。

(2) について、このとき得た印刷物（大参り行程資料）より札所数は142であることが判明した。(3) について、鞍内西札所以外の場所の詳細は明らかにはできなかった。しかし、大参り行程資料から、札所名が地名、または個人宅名であることが分かった。

大参り行程資料に基づき、著者が徒歩やオートバイ、自動車で鞍内西以外の札所を探索した。その結果、その他に17の札所についてその場所を確認した。なおこの17の札所に個人宅は含まれていない。その他予備調査での聞き取りで、久留米市寺町の医王寺が三井四国の世話役であることも分かった。

### 4.2. 本調査とその概要

142という札所の数は、一般的な写し霊場の札所数（88に加え、いくつかの番外札所）と比較しても多い。例えば1897年に本尊を安置し始めた長崎県東部にある茂木四国八十八ヶ所は、札所番号と対応する札所名が四国と一致している<sup>7)</sup>（最終的に完成するのは1929年とされている）。したがって札所数もおのずと88となっている。

予備調査を踏まえ、予備調査後さらに札所を探索した。これを本調査とする。加えて、本調査では2020年2月に三井四国の世話役である医王寺のI氏への聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の際、I氏より関連する資料を得た。さらにI氏より三井四国の札所位置特定を目指すO氏を紹介され、さらに資料を得た。

## 5. 結果

予備調査の段階で、三井四国には142の札所があることが分かっていた。また、札所は個人宅にもわたっていた。一般的な写し霊場では仏像のみか弘法大師像のみ、または仏像と弘法大師像が一对であることが多いが、三井四国では加えて複数の仏像と弘法大師像が祀られている場合、また札所にミニ霊場がある場合が確認できる。

### 5.1. 資料の分析結果

#### 5.1.1. 修行大師像

医王寺には台座に「三井四国記念」と記された修行大師像がある（図1）。修行大師像の傍らにある石燈籠に、建立時期を示すと思われる「大正六年四月」が記されている。この台座に

は、後述する「三井四国徧禮道案内」の御土受人名部分に書かれた14名の氏名が見られる。I氏によると、この14名は7名ずつ2回に分けて四国を参り、御土をお預かりしてきたとのことであった。

### 5.1.2. 三井四国徧禮道案内

医王寺で複写し保管されていた資料に、「三井四国徧禮道案内」がある。この資料の冒頭には、「四国徧禮道指南」（眞念・稲田，2015）<sup>8)</sup>とほぼ同様に、弘法大師の御影をはじめ、準備すべき札はさみ板や紙札が案内されている。札所リストの先頭に「三井四国川南道中案内」とあり、その後本尊の御影、本尊名、札所番号、札所名、前の札所からの距離が記されている。札所数は90ある。

最後の2ページにそれぞれ「三井四国御土受人名 明治三十五年旧正月十三日 出立」「三井四国御土受人名 明治三十六年旧二月十九日 出立」とあり、7名ずつ合計14名の氏名が記されている。前述のとおり、この14名の名は修行大師像の台座にも見られる。

三井四国徧禮道案内に書かれている90の札所の位置については、現在失われているまたは移動していると思われる数か所以外をO氏が特定している（大野，2020）。またO氏の調査結果は、筆者による札所現地調査と一致していた。



図1：医王寺の修行大師像（著者撮影）

### 5.1.3. 三井川北道中案内

三井四国徧禮道案内の冒頭にある「三井四国川南道中案内」という記述から、筑後川の北側と南側に別の写し霊場が存在したことが伺える。実際O氏の調査により、「三井川北道中案内」（1926年）が見つかっている。本資料は、福岡県小郡市文化財課が保管していたものである。

冒頭部分を四国徧禮道指南に倣っていた三井四国徧禮道案内とは異なり、三井川北道中案内では勤行次第が書かれている。勤行次第ののち、本尊の御影、本尊名、札所番号、札所名、ご詠歌、前の札所からの距離が記されている。

札所は札所番号1番から順に書かれていないが、実際の四国の札所番号・札所名と一致している。ただし、四国の札所番号・札所名が複数の札所として設定されており、また札所名として東寺も見当たる。さらに札所数は334と88を大幅に超えている。

### 5.1.4. 福岡縣三井四國八十八ヶ所霊場の絵地図

医王寺で保管されていた資料として、「福岡縣三井四國八十八ヶ所霊場」の絵地図もある（図2）。大きさは、A2用紙サイズである。本資料は複写されたものであり、左肩にある「明治三十六年」という記述は、付箋紙などでのちに貼添されたものと思われ、正確な地図作成の年を表しているとは言えない。

しかし、地図内にはその作成時期を推測できるものがかき込まれている。まず、鹿児島本線（九州鉄道）があり、蒸気機関車が走っている様子が見られる。1890年に千歳川仮停留所と久留米駅間が開業したことから（川崎，1989）、少なくともこの地図はそれ以降のものである可

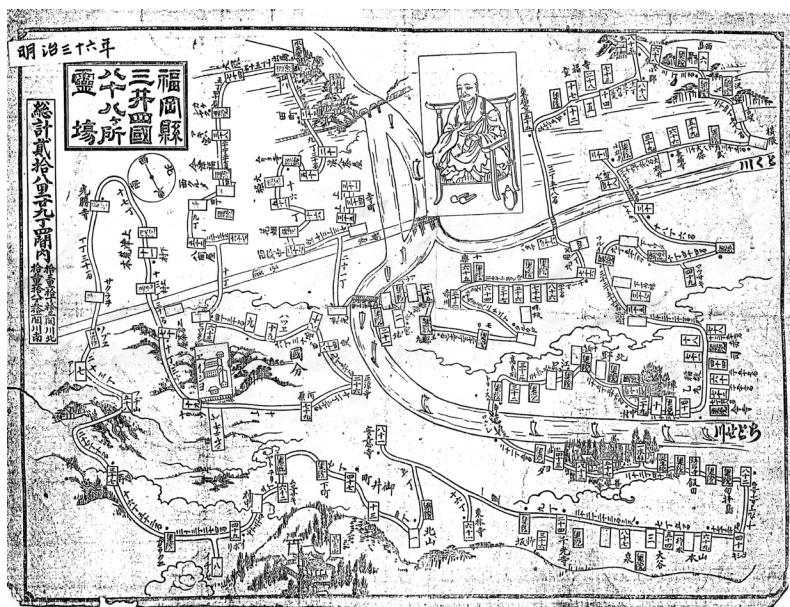


図2：「福岡縣三井四國八十八ヶ所霊場」の絵地図（医王寺所蔵）

能性がある。

また、地図中の「國分」付近に「エイシヨ」と記された部分がある。ここは位置関係から、旧陸軍の歩兵第48連隊の駐屯地を指していると思われる。その創設は1897年である<sup>9)</sup>ことから、少なくともそれ以降に作成された絵地図であることが推定できる。

さらに、地図中の「国道」は、現在の国道3号線を示していると思われる。国道3号線は、明治国道11号線として1885年に開通している。1911年から地図上に単に「国道」と示すのではなく、「国道11号線」という号線呼称になったことから（広川町史編さん委員会，2005），この地図はそれ以前に作成されたものと考えられる。

#### 5.1.5. 大参り

大参りは、予備調査においても春と秋の2回実施されていることが分かっていた。また予備調査によると、大参りは毎年異なる札所から打出ししていたことも分かっている。大参りごとに行程表が頒布されており、今回の調査を通して以下の6回分の大参り行程資料を得た。

- 昭和五十八年度 三井四国秋季大参り
- 昭和六十年 三井四国秋季大参り
- 平成十六年度 三井四国秋季大参り
- 平成二十五年 三井四国秋季大参り
- 平成二十八年度 三井四国春季大参り
- 平成三十一年度 三井四国春季大参り

予備調査では、大参りは6日間実施されていたが、少なくとも平成16年秋季大参り（2004年）では7日間の実施であった。大参り行程表より、春季大参りは必ず4月3日、また秋季大参り

は必ず10月2日より始まっていることが読み取れる。

大参り行程資料には、札所番号はなく札所名のみ記されている。三井四国徧禮道案内では存在した札所番号が失われていることが分かる。また、予備調査で2016年（平成二十八年春季）の札所数は142に及んでいることが分かっていた。しかし年々札所数は減少している様子が伺える（表1）。

表1：大参り資料からカウントした札所数

	1982年秋	1985年秋	2004年秋	2013年秋	2016年春	2019年春
札所数	161	156	152	146	142	141

出所：大参り行程資料より著者作成

また、本資料には注記が見られる。まず「大師旗より、先に行かぬこと 交通事故に、注意すること」の2つが挙げられる。後者の注意書きに関しては、1973年10月4日に久留米市高野町で起きた大参り参加者の交通事故に関連すると思われる。交通事故でお亡くなりになった方の供養のため、1975年に事故現場付近に地藏菩薩像が建立されている。この交通事故の内容は、地藏菩薩像の台座にある銘板に詳細が記されている。I氏によると、のちの道路拡幅工事に伴い医王寺へ移設されている。

次に「泊まりは団長外八名位」との注記が、「昭和六十年度 三井四国秋季大参り」まで見られる。以降この注記は見られなくなるため、少なくとも1985年10月の大参りまでは宿泊を伴っていたことが分かる。

#### 5.1.6. 三井四国の八坂寺（第47番）

三井四国徧禮道案内では札所番号と札所名が記述されているものの、四国の札所番号と札所名との対応が基本的でない。これは三井四国の特徴ともいえる。

そのようななか三井四国徧禮道案内によると、三井四国の札所である八坂寺は唯一四国の八坂寺と同じく第47番札所であり、さらに本尊も阿弥陀如来とされている<sup>10)</sup>。しかし現地札所調査によると、実際の本尊は不動明王である。

三井四国の八坂寺には、正面に「三井四国八十八ヶ所」、左側面に「四拾七番八坂寺」、背面に「明治四十三年八月」と記された石柱がある。また、その隣には、「三井西国世三所第三番」と記された石柱がある。

八坂寺のお堂裏にある記念碑（図3）には、以下が刻まれている。□で示した部分は判別不能である文字である。□で囲った文字は今回の調査では判読できなかったため、御井町誌（御井小学校開校百十周年記念事業特別委員会町誌部、1986）から補完した。また、下線のある文字は、御井町誌では誤っていたため、今回の調査で修正した部分である。なお、御井町誌の記述では新字体となっているが、本稿では記念碑で使用されている字体を使用している。また改行位置も記念碑に倣った。

（正面）

記念碑

抑是寺弘法大師ハ四国四十七番

八坂寺弘法大師之分身也

明治二十年三井郡井上村西岡宥浄身□  
 ニシテ四國ヲ再三巡拜五十七番仙遊寺ニ於テ  
 其夜御告ゲ四十七番八坂寺ニ二体ノ因師有其  
 内一体之大師ヲ頂國元ニ歸レトノ御告□早速八  
 坂寺ニ至リ一体之大師ヲ頂歸國致シ御井町  
 ニテ世話人集リ是處ニ奉拝授シ者也  
 因□始末之大略ヲ記ス

(右側面)

明治二十三年三月吉日

(左側面)

(14名の世話人名<sup>11)</sup> が記されている)

御井町誌では、八坂寺が「大師堂」として記述されている。0.5 m ほど弘法大師像が1体、0.2 m ほどのものが2体ある。本尊と思われる不動明王像は1.0 m ほどである。



図3：八坂寺の記念碑（著者撮影）

#### 5.1.7. 三井四国参拝団の解散についてのお知らせ

三井四国団長名による「三井四国参拝団の解散についてのお知らせ」が頒布されている。この資料は2018年10月に作成されている。札所を閉じる者が増え、また常時参拝できる者も5名前後となったことで、参拝団の継続が困難になったことが解団の理由とされている。

#### 5.1.8. お札

札所には、大参りの際に納められたと思われる木または紙製のお札が残されていることがある。お札から読み取れる「平成三十年」に「開創百二十周年」を迎えていることから逆算すると、1898年ごろに三井四国は開設されたこととなる。

#### 5.1.9. 三井四国徧禮道案内や福岡縣三井四國八十八ヶ所靈場の絵地図にない札所

大参り行程資料からも分かるとおり、札所数は140を越えている。筑後地域では、三井四国の札所と思われる祠やお堂を見かけることがある。多くの札所名は地名であるが、個人宅も含まれている。札所には三井四国のお札が納められている(図4)。

#### 5.1.10. 「久留米四国八十八ヶ所」の存在

三井四国札所の探索やI氏への聞き取り調査より、三井四国の近隣に久留米四国八十八ヶ所(以下、「久留米四国」とする)という別の写し霊場が存在していた。前述の事故現場に建立された地藏菩薩像の銘板から



図4：「西町地蔵堂」には地藏菩薩3体と不動明王が祀られている。弘法大師像は見当たらない。右奥に三井四国のお札が確認できる。(筆者撮影)

も久留米四国参拝団の存在が分かる。

三井四国の「三井」はかつての三井郡境界のことを指していると推測できる。三井四国の札所もかつて三井郡であった現在の久留米市の東側と筑後川を渡った小郡市、三井郡（大刀洗町）を中心に存在している。一方、久留米四国の札所は主に現在の久留米市の市街地に確認できている。久留米四国の場合、仏像や弘法大師像が祀られているものの形態は祠に近い場合が多い。I氏によると、久留米四国に関しても大参りがあったがすでに途絶えているとのことであった。

## 6. 考察

### 6.1. 三井四国の開設時期

三井四国の開設年を確定することは困難である。しかしながら開設年は、お札から読み取れる年（1898年）、または三井四国徧禮道案内に記述がある御土を受け取りに出発したとされる年（1903年）以降かつ医王寺の修行大師像が建立される1917年までの間であると考えられる。

### 6.2. 三井四国の開設方法

三井四国徧禮道案内や福岡縣三井四国八十八ヶ所霊場の絵地図では、札所名が四国のそれと一致しない。しかし札所番号の概念があり、実際の札所数も四国とほぼ同一の90である。このことから、三井四国開設の際に新たな札所を作ったのではなく、もともと集落にあった祠や観音堂、不動堂、大師堂などを利用し（例えば、図5）四国に見立てた可能性がある。

例えば、三井四国徧禮道案内や福岡縣三井四国八十八ヶ所霊場の絵地図に記されている第13番札所の御井寺は現存する寺院である。御井寺は廃仏毀釈後、1878年に再興されている。また第1番札所の北山の奥院も、現在の「岩井の地藏菩薩彫像板碑」に該当すると思われるが、これは1404年に建立されたとされている。これらは三井四国が開設されると推定される時期より古い。

一方、三井四国の八坂寺（47番）は、唯一札所名と札所番号が四国と一致する。しかし八坂寺の成り立ちが示される記念碑には、1890年と記されている。さらに記念碑の伝承内容は1887年のこととして記されている。これも想定される三井四国開設時期より古い。

さらに四国の八坂寺を写したのであれば本尊は阿弥陀如来であるはずであるが、実際は不動明王である。これは三井四国の八坂寺となる以前より、不動明王が祀られていたためであると考えられる。

このことから、もともとお堂はあったが記念碑に記された伝承が起きたのちに八坂寺と呼ばれるようになったことが推測できる。つまり八坂寺は三井四国のために作られたのではなく、三井四国を開設する際に、すでに存在していたお堂を、三井四国の開設時に「三井四国の第47番札所八坂寺」と設定したと考えられる。



図5：札所：宗崎の観音堂の様子。向かって左に弘法大師像が見える。宗崎は他2つのお堂で構成されている。御井小学校開校百周年記念事業特別委員会町誌部（1986）によると、観音像は1760年に建立されたものである。（著者撮影）



### 6.3. 札所数

次に最終的に141にまで札所が増えた理由を検討する。まず三井四国は筑後地域にすでにあった祠やお堂などに四国の札所を当てることによって開設されたと考えられる。三井四国偏禮道案内から推測される巡礼経路沿いに、大参り行程資料に記された札所があることが分かる。このことから当初札所ではなかったが、巡礼の経路とその近隣に存在した祠やお堂などを札所として加えたと考えられる。例えば御井寺に隣接する三井四国偏禮道案内には見当たらないお堂には、1849年に建立された地藏菩薩像が祀られている（弘法大師像なし）。

また新たに建立された祠やお堂なども札所として加えたと考えられる。例えば予備調査した鞍内西は、三井四国偏禮道案内には見当たらない。鞍内西は県道758号線に隣接しているが、地理院地図によると少なくとも1914年までこの県道はなく、一帯は桑畑であった。このことから久留米が軍都として発展するなかで設けられた道路沿いに大師堂が新規設置され、のちに三井四国の札所として追加されたと考えられる。

また小森野校区歴史編集委員会（2017）は、小森野地区の霊場として「高野」「二丁地中」「二丁地西」「中通り」「小森野下」5つがあり、明治の末期ごろにこれらの霊場を住民が建立したとしている。三井四国偏禮道案内では鞍内西札所同様、これらの札所も見られないが大参り行程資料では見られる。このように三井四国偏禮道案内にはなかった観音堂や不動明堂、大師堂なども順次追加されることにより、札所が増加しさらに札所番号も失われていったと考えられる。

## 7. まとめ

三井四国には数多くの札所が存在し、札所名や札所数が四国と一致しないなどの特徴的な点がある。そのため予備調査と本調査で、関係者への聞き取り調査を実施するとともに資料の入手・分析し、その成立背景を検討した。

まず三井四国の設立時期は「明治20年代以降」（柴谷，2008）に該当するといえる。また、筑後地域には三井四国開設以前より大師信仰が存在していたことが推測される。例えば、八坂寺の弘法大師像に関する伝承は、三井四国が開設されると推測される時期より前に記念碑に記されている。また御井小学校開校百十周年記念事業特別委員会町誌部（1986）によると、かつて八坂寺は大師堂と呼ばれており、これも三井四国以前に存在した大師信仰の裏付けとなりうる。さらに三井四国とは別にほぼ同じ地域で別の写し霊場（久留米四国）が存在していたことから筑後地域に大師信仰が存在していたといえる。

また三井四国開設後も、鞍内西札所や小森野地区の札所群に見られるようにもともとは三井四国の札所ではなくとも、札所が開設される事例がある。これらのことから、三井四国開設後も筑後地域には大師信仰が浸透していったことが示唆される。

次に札所数が140を超えるまでに増えた理由は、既存の祠やお堂などを札所に加えたことと、さらに新たに建立した祠やお堂を三井四国の札所として加えたためであるといえる。三井川北道中案内では334もの札所が存在している。これも三井四国同様のちに札所が加わったためであると思われる。筑後地域において信仰対象としては後発ともいえる三井四国であるが、もともと筑後地域に存在した大師信仰と、柴谷（2008）が指摘している明治20年代以降の霊場開設時期とが相まって成立したといえる。また、札所の増加により、三井四国設立時に存在していた札所番号は次第に意味を無くし、札所名のみが残ったことが示唆される。

一方次第に追加されたとと思われる札所ではあるが、大参り資料より1982年に161あった札所

も2019年には141となり、約40年で20の減少が確認できる。また2019年春季大参りで参拝団は解団している。解団の理由として「三井四国参拝団の解散についてのお知らせ」やI氏は、団員の高齢化を挙げた。一方、A氏や聞き取り調査の際に偶然医王寺で出会った方は、本州四国連絡橋ができたことにより四国に気軽に行けるようになったことも理由に挙げていた。

本研究では、課題も多く残されている。まず、札所番号が1番から順になっていない理由は不明である。また、三井川北四国八十八ヶ所との関係も分かっていない。さらに追加された札所とその位置の特定もできていない。その他、約150年続いた三井四国の大参りであるが、地域での詳細な活動は明らかにできていない。今後、三井四国の始まりから大参りの終了まで、そしてその後の参拝団団員や筑後地域の住民との関わりに関する調査を継続したい。

### 【注】

- 1) 例えば、各寺院の取り組みとして、特別開帳や納経帳への記念のスタンプを押印、記念散華の頒布がなされたりした。
- 2) 台湾では日本統治時代に「写し」がなされ、現在でも一部が残存している（中川、2016）。
- 3) 原著に合わせ和暦で表記した。
- 4) 山本（2013）では「設置主体と設置規模」としているが、本稿では「開設主体と開設規模」に言い換えた。
- 5) 四国の各札所の砂を対応する札所に写す。近藤（1993）は砂をシンボルと表している。シンボルは、「お砂踏み」と呼ばれる聖地巡礼の疑似体験でも一般的に利用されている。
- 6) ただし福岡県からの巡礼者数の割合である。
- 7) 1929年に四国第三十番札所が安楽寺と善楽寺の2つとなるが、茂木四国八十八ヶ所の第三十番札所名は善楽寺となっている。時代背景を鑑みると、安楽寺であると考えられるが、札所名決定の経緯は不明である。
- 8) 眞念による「四国徧禮道指南」（1687年）を底本とし、稲田が訳注している。
- 9) 創設年は、陸上自衛隊久留米駐屯地資料館内の展示「久留米駐屯地の沿革」と担当者の説明による。資料によっては1896年としているものもあるが、物理的な土地・建物の存在を鑑みて本稿では1897年を採用した。
- 10) 三井四国の第十九番札所である字鍵水のお堂には「一九番立江寺」の寺号板がある。札所番号から四国の第十九番札所立江寺が連想されるが、三井四国徧禮道案内並びに2019年春の最後の参り行程資料まで札所名は字鍵水または鍵水であり、立江寺ではない。
- 11) ここの記されている14名の氏名は、「三井四国徧禮道案内」の御土受人名に記された者とは異なる。

### 【参考文献】

- 大野（2020）資料を合わせると見えてきました！ - 三井四国八十八ヶ所霊場, <https://miishikoku88.jimdofree.com/%E5%85%A8%E8%B2%8C%E3%81%8C/>（2020年12月24日閲覧）
- 小田匡保（1984）「小豆島における写し霊場の成立」『人文地理』, 第36巻, 第4号, pp. 59-73.
- 川崎孝夫（1989）『鉄輪の轟き 九州の鉄道100年記念誌』, 九州旅客鉄道.
- 国土地理院（2017）平成29年全国都道府県市区町村別面積調, 付3 島面積, [http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/201710/f3\\_shima.pdf](http://www.gsi.go.jp/KOKUJYOHO/MENCHO/201710/f3_shima.pdf)（2018年2月15日閲覧）

- 小森野校区歴史編集委員会編（2017）『小森野・高野の郷土誌』，小森野校区まちづくり振興会。
- 近藤隆二郎（1993）「北播磨におけるミニチュア巡礼地の空間体験構造に関する研究」『造園雑誌』，56巻，5号，pp. 247-252.
- 柴谷宗叔（2007）『遍路と巡礼の実践学』，高野山出版社。
- 柴谷宗叔（2008）「写し霊場と新規霊場開設の実態について」『密教文化』，2008巻，221号，pp. 73-97.
- 眞念・稲田道彦（2015）『四国徧禮道指南 全訳注』，講談社。
- 中川未来（2016）「植民地台湾の四国八十八ヶ所写し霊場」『四国遍路と世界の巡礼』，第1号，pp. 43-50.
- 広川町史編さん委員会編（2005）『広川町史 下巻』。
- 御井小学校開校百十周年記念事業特別委員会町誌部（1986）『御井町誌』。
- 山川廣司（2012）四国遍路の魅力 ～人はなぜ遍路に出るのか：大学と四経連との連携による四国学，<https://www.yonkeiren.jp/shikokugaku-yamakawa.pdf>（2020年3月12日閲覧）
- 山本準（2003）「徳島県における四国八十八か所写し霊場」『鳴門教育大学研究紀要（人文・社会科学編）』，第18巻，pp. 29-41.
- 頼富本宏・白木利幸（2001）『四国遍路の研究』，国際日本文化研究センター。

#### 【謝辞】

本研究に関する調査においては、医王寺様、大野康様、国交省福岡国道事務所の大住智宣様、陸上自衛隊久留米駐屯地資料館様より貴重な資料、ご意見を賜りました。深く御礼申し上げます。